



ライプニッツの時間論 : 「現実的時間の関係主義」

松田, 毅

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 47:1-41

(Issue Date)

2020

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012053>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012053>



ライプニッツの時間論

——「現実的時間の関係主義」——

松 田 毅

*Citharoedus ridetur, chorda qui semper oberrat eadem*¹

はじめに：問題としての「現実的時間」

ライプニッツの時間論は、ニュートンの「絶対時間」あるいは「時間の実体主義」に対して「関係主義」として特徴づけられるのが一般的であり、筆者は(松田.2005a)で、クラークとの往復書簡に基づき、それを論じたが、本稿では、さらに踏み込んで、ライプニッツの形而上学的時間論の「深層」次元を浮き彫りにしたい。まず、「現実的時間」の問題を考察する前提として、時間の哲学の簡単な輪郭を描き、ライプニッツの時間論に関する簡潔な見通しを与えることから始める(1)。

そのうえで、ライプニッツの1715年のクラーク宛第5書簡27節の「tempus effectif 具体的ないし現実的時間」(以下「現実的時間」)について考える手がかりを、力の測度に必要な「抽象的ないし数学的時間」と「現実的時間」の対比に求める。ライプニッツが「不可識別者同一の原理」を適用し、互いに独立の「瞬間」が、物体運動を記述する変数として、無差別かつ均質に「流れる」可逆の絶対時間の(相互に置き換え可能な)「観念性」をもつ点を特徴づける

1 ホラーティウス『詩論 *de Arte poetica*』(355ff. 岩波文庫、岡道男訳250)「いつも同じところで間違うギター弾きは笑いものになるだろう」(GPVI.244)。本稿は、2018年11月11日に金沢青陵大学で開催の第10回ライプニッツ協会大会で報告した同名の発表を改稿したものである (cf. Matsuda. 2016a)。有益な質問や意見を下さった方々に感謝したい。

とともに、「現実的時間の個性性」を「質的な差異」から浮き彫りにしようとする点を確認する (2)。

続いて、「現実的時間」に関し、クラーク宛書簡と同時期のBourguet宛書簡(GP III.581ff)で、ライプニッツが「瞬間」と「時制」に関する考察を行った点に注目する。『モナドロジー』22節は、よく知られているように、「単純実体」のあらゆる現在の状態は、先行する状態の自然な帰結であり、「現在は過去を担い、未来を孕む」と語るが、「連続体合成の迷宮」から逃れるため、ライプニッツは、幾何学的な点と見なされる限りの「瞬間」(「瞬間G」とここでは呼ぶ)の「観念的關係」と過去から未来へ「質」的に変化する「現実的時間」としての「瞬間」(「瞬間R」とここでは呼ぶ)の依存關係とを存在論的に区別する。後者、「瞬間R」は、先行の瞬間が後続の瞬間に対し、存在論的に優位にあり、非対称的關係を有する——これは「時間の矢」の特徴である。これらの特徴からライプニッツによる時制の存在論的位置づけを確認する (3)。

最後に、「現実的時間」の關係性と方向性が「前後關係」としての(可能的な)「継起の秩序」——空間の(可能的な)「同時性の秩序」との——と同一視できない点をブルゲ宛書簡、『万物回帰 *Ἀποκατάστασις πάντων* (*La Restitution universelle*)』(1715, Leibniz.1991)から論じる。ライプニッツは、モナドの連続する変化と変化の方向が存在論的に「先決定」されていると考え、「瞬間R」の系列を「エンテレケイア」としてのモナドの「完全化」の展開とみなす。この過程は、人類の歴史だけでなく、生物の自然史においても紆余曲折を含みながらも、現実化される、と思弁する。ここではライプニッツが『弁神論』と『万物回帰』で示唆する、ホラーティウスの『詩論』に登場する「キタラー弾き」の隱喩の解釈も手がかりにして、この問題を考察したい。ライプニッツは、現実的時間としての「瞬間R」に「不可識別者同一の原理」を適用し、国家であれ、個人であれ、人類だけではなく、「生物」と宇宙の「進化」も、それぞれ時間的な「個性性」を有するとともに、全体としてモナド論的・価値論的に導かれていると主張する。この主張にライプニッツ本来の現実的時間の「關係主

義」を見ることができると筆者は考える（4）。

1. 時間の哲学とライプニッツの時間論の位置

本稿で問題となる、ライプニッツの時間論のかなり一般的な位置づけを行っておきたい。古代ギリシャ以来、哲学が時間を問題にする場合、まず、最初に問われたのは、「時間とは何か」という時間の「本質」ないし定義と、そのように定義される「時間はどのように存在するのか」という時間の存在論的位置づけに集約することができるだろう。プラトンの場合も、時間を「生きた永遠のコスモス」の星辰のような周期的運動のパターンとして捉えようとしたし、アリストテレスも地上の生物たちも含めて、生成変化を扱う自然学のみならず時間を「運動の数」（219b2ff）や「尺度」（220b32）として定義しようとした。しかし、時間の存在自体は、プラトンにとっての真実在である「イデア」や、アリストテレスにとっての「形相と質料」を兼ね備えた個体的な「実体」に較べれば、それぞれそのような「生き物 *ζῷον* の似像」（37d）であったり、個体的・実体的ではない「何か偶有的なもの」（Böhme, 190）であったりして、時間は、実在しないものあるいは何か二次的な存在と考えられた。

本稿が論じる、ライプニッツが同時代の哲学者たちとの論争で多くの場合、時間を可能的に「継起するものの秩序」として定義し、それを数学的関係ないしは「観念的なもの」として把握したこともこれに対応している。その場合、この文脈で問題となる時間が、プラトンやアリストテレスの場合と同様に、自然的ないし物理学的時間であることは言うまでもない。ニュートンとライプニッツのあいだの、古典的な論争としての、時間の「実体主義」と「関係主義」の対立は、現代にまで引き継がれる、以上のような問題群に属することをまず確認しておきたい²。

2 カントの『純粹理性批判』、特にその「超越論的感性論」の時間と空間の諸規定、それらの「超越論的観念性」と「経験的実在性」の規定は、ニュートンとライプニッツの論争を抜きにして理解することはできない。

他方、これもよく知られているように、中世哲学の祖のひとりである、アウグスティヌスの『告白』は、時間に関する問いをとりわけ困難な問いとして定式化した。時間は、わたしたちが体験上よく知っているように思われるものであるが、あえてそれがどういうものであるかを語ろうとすれば、思考の内省的な眼差しから逃げ去ってしまうような、何か捉えがたいものに関する問いである、とアウグスティヌスが表明したとき、そこで問題となったのは、時計によって計測される、天体や物体の運動の時間というよりも、現在、過去、未来のような私たち自身の存在に関わる、「生きられる時間」であった。この時間論の地平では、しばしば、どの時制に存在論的優位を認めるかが問われると同時に、測定される時間を何か「構成されたもの」あるいは何か表層的なものとして位置づける傾向が認められる。

言い換えれば、時制の時間は、体験される「主観的」時間であり、現象学風に表現すれば、「内的時間意識」とも呼べるものの問題群に属する。この限りで、アウグスティヌスの時間論は、プラトンやアリストテレスそしてニュートンの「客観的」な時間論と対照的であるが、バルグソンの「純粹持続」やフッサールの「生き生きとした現在」あるいはハイデガーの「時間性」に関する実存論的時間論は、このようなアウグスティヌス的時間論の系譜に属すると言える。ここでは、私の現在が創造的に進化する人類史の拡がりのなかで、過去を担いつつ「飛躍」すること、あるいは、「噴水のように湧きだし」、それ自体として与えられる現在を起点に、過去把持や（未来の）予把持のような意識への所与性から「時間客観」を構成する様が記述される。さらには、自分自身の「将来の死」に気づくことを通して、自己の全体存在に目覚め、不安を感じつつも、歴史性を帯びた過去を担いながら、現在の「瞬間」に、将来に向け自らの可能性を投企する「現存在」の実存論的時間論が展開される。もちろん、ここでも「時間とは何か」、「時間はどのような存在」かが問われてはいるが、時間は、定義されるよりも、まずは詳細に「それが与えられるとおりに」記述されるのであり、むしろ、そこから「時間性」が、現存在として人間存在の「意

味」を（神の）「永遠」や「遍在」の時間性との対比で特徴づけることが重要視される³。

ライプニッツの「モナド」の時間論にも、より自然化されたかたちではあるが、このような時制論的局面が見られる。確かに、そこには「現在は過去を担い、未来を孕む」という洞察が含まれるのである。ただし、ライプニッツは、ニュートンの絶対時間の場合と同様に、絶対時間も、可能な継起の秩序を表現する、数学的關係として「構成可能」とするだろうが、その種の「構成」を現象学的ないし実存論的構成と同一視することはできない。この点は、ライプニッツの時間構成の「基底」が、現実的時間の個性性にあり、人間の時間経験の所与にないことから明らかになるだろう。時制としての時間が、主観的ないし人間の相貌を帯びていることはまちがいないが、本稿が問題にする、ライプニッツの「現実的時間」あるいは個体的・具体的な時間は、そのような時制の諸位相や瞬間の存在を含むとはいえ、それらの特徴に尽きない存在論上の「深度」を有する。ライプニッツの現実的時間は、デカルト的であれ、フッサールの「自我」が対象としてそれを意識、つまり知覚したり、想起したり、予期できるような、時制的時間よりも「深い層」に、つまりより「基底的」な存在次元に位置する点を示すことが本稿の課題の一つである。

ところで、時間の存在を論じる際、分析哲学的なアプローチも無視することができない。この点で、現代の哲学的な時間論は、マクダガートの『時間の非実在性』（1907年）を一つの軸として展開してきた、と言っても過言ではないだろう。特に、マクダガートが時間を、「A系列」の時間と「B系列」の時間に分け、——マクダガートはこれに加え、非時間的な「C系列」についても述べるが——時間の本質は、時制としての「A系列」の時間にあるが、そのような「A系列」が「実在する」とは言えない点を論じた点が、多様に解釈、議論

3 「時間性」は、『存在と時間』のハイデガーの場合、65節などでさらに現存在の「気遣い」から解釈されることになる。そこでは「今」の連続体として表象されるような「通俗的時間」に対する脱自的な「根源的時間性」と実存的な「時熟Zeitigung」の問題が論じられる。

される現状があるからである。マクダガートは、確かに出来事の位置関係が定まった「B系列」は、「永続的なもの」として、過去から未来に向かう方向性を欠いており、その点では時間経験には合致しないので、時間の本質ではないと述べる。言い換えれば、マクダガートは、カレンダーの日付のようなかたちで、順序を付けることができる出来事の「前後関係」としての「B系列」——正確には、「より前からより後へと連なる位置の系列」⁴——には時間の本質はないとする一方で、過去、現在、未来の「A系列」——正確にはそれぞれの「位置の系列」（マクダガート.18）——については、実在性を認めることを許さない、論理的な難点を指摘したからである。

たとえば、女王「アン・スチュアートの死」という出来事に関する、時制への言及を含む文が例として挙げられる。この歴史上の出来事は、その後続く、女王エリザベス1世の即位よりも前の出来事であるが、アンが生まれた時点では、未来のことであったし、刑死の「瞬間」に現在のことになり、2019年には遠い過去になった。しかし、「アン・スチュアートの死」について語る場合、この歴史上の出来事に関して、「位置としての未来」が、同じく「位置としての現在」や「過去」に変わるような「位置の変化」があると認めるとすれば、そこから、或る出来事が未来であり、現在や過去でもあるという、「矛盾」が生じると考えられることから、出来事そのものとは区別されるような、位置の系列としての過去、現在、未来が、「実在的」である、と見なすことはできない、と論じたのである。

マクダガートのこのような「時間の非実在性」の主張は、時間の本質として把握される、過去から現在を経て、未来へと至る「位置の系列」は「実在しない」というものである。つまり、マクダガートが仮定するように、出来事自体には変化がないとした場合、主語となる出来事に帰属させられる、述語として

4 「より前」と「より後」、つまり継起が時間的規定であることをマクダガートは指摘し、「A系列のないところB系列はありえない」と認めている。つまり、B系列はA系列の時間を前提としている。

の時制的な規定が変化することになり、互いに両立しないというのである——
実は、述語としての時制の両立不可能性は、空間のような同時存在の秩序ではなく、可能な「継起の順序」というライプニッツの時間の定義にも含まれるが、ライプニッツの場合は、位置の系列だけを抽象化して論じることはなく、主語となる、実体自体に属性の変化を認めることになる点がマクダガートの場合とは異なり、主語としての「アン女王」の属性の変化として、刑死という出来事は位置づけられることになるだろう。ライプニッツの場合は、これらのAとB、二つのタイプの系列がそれぞれ、それ自体として存在するのではなく、両系列への言及を含む、出来事の前後関係や時制に関連する文ないし言表の次元に先立つ次元、つまり、それらに先立ち、展開する、諸属性を変化させ続ける実体群——そのような変化する「世界」——がまず有るのである。しかし、それらの存在の仕方あるいは変化の記述自体は、ライプニッツの場合も、主語・述語論理と数学的關係の枠組みを用いて、系列的とならざるを得ない。

マクダガートの論証やその多様な解釈の詳細をここでこれ以上扱うことは、本稿の課題を超えるが、マクダガートが、「B系列」が時間の本質ではないとした後、「ある系列が存在し、この系列がA系列規定と結合することによって時間が生まれる」（マクダガート.27）としている点には触れておきたい。この系列が「C系列」と呼ばれるが、それは「時間においては出来事であるような諸実在のあいだに成り立つ永続的な相互系列」である。「C系列」自体は時間的ではなく、変化がなく、ただ順序があるだけである、とマクダガートは言う。マクダガートの挙げる例は、順序どおりで欠けたもののない、アルファベットのM,N,O,Pのような語の例や一定の規則に従う名前前のリストである。マクダガートに従えば、「変化と時間が入ってきてはじめて、このC系列の諸関係は、より前・より後の関係になり、B系列となる」が、そこに「変化の方向」が加わることで「時間が発生する」。

これまで概観してきたような、時間の存在自体は「所与」であると見なす、二つの時間論のタイプからすると、「時間の発生」という言い方は多少とも思

弁的で違和感を覚えさせるが、マクダガートが、19世紀末の「英国観念論」の代表者のひとりであり、実際、「C系列」の概念の導入直後に、ヘーゲルの弁証法の「カテゴリーの系列」に触れていることを考慮すれば、多少ともその違和感は解消される。また、このことが、無時間的な規則的順序を有する「C系列」と変化と方向を有する時制的な時間関係を理解するうえで助けとなる⁵——このように述べることでマクダガートは（「不変・不動」の「有る」を語る、パルメニデスと「矛盾」からの生成変化を語る、ヘラクレイトスの徒としての）ヘーゲル主義者としての本領を発揮しているのであろう。

マクダガートの議論の要点を確認するならば、「過去から現在を経て、未来へと至る位置の系列」としての時間は、確かに、或る出来事に過去、現在、未来という互いに両立しない、「属性としての位置」を同時に同一の時制として帰属させれば、矛盾が生じるという点では、（「不変・不動」の意味の）「实在」ではないが、たとえば、マクダガートの歴史的現在を起点にすれば、「今朝の朝食は過去であり、この会話は現在であり、今晚の夕食は未来である」（マクダガート.31）のような、何も問題のない、トリビアルな文のかたちで理解されるかぎりには、当然、容認される——ライプニッツとマクダガートの時間論はここで分岐する。比喩的な言い方をすれば、ライプニッツは、少なくとも時制としての時間の存在に関して、パルメニデス的でもないしヘラクレイト的でもないからである。ライプニッツの場合、時制としての時間は、論理的な矛盾を含む存在ではなく、言わば「よく基礎づけられた現象」としての実在性を有し、実体としての存在が、περιχώρησιςの概念が含意する、「存在の連鎖的時間化」として変化と方向を実在的に有することを示すものである。ライプニッツの「存在」は不動ではなく、本質的に動的であり、時間的なものである。

これまで述べてきたように、マクダガートは自分の主要な論証が以下の2点であるとしている。つまり、「B系列はA系列なしにはない」こと（マクダガー

5 確かに、ヘーゲルの「大論理学」には「概念」が自己展開する、その論理的な順序はあるが、その秩序自体には時間も変化もない。

ト.34ff)と「A系列が矛盾を含む」ことである(マクダガート.39ff)。ここでこれ以上、立ち入って吟味することはできないが、本稿のライプニッツの時間論の立場では、前者に反対する理由はない一方、後者については、その主張をそのまま容認することはできない。以下で補足説明するように、ライプニッツが可能な「継起の秩序」としての時間が「観念的」なものであり、或る意味では「非両立性」を認めるように見えてとしても、それは、「過去から現在を経て、未来へと至る位置の系列」そのものの存在を否定するものではない。アンが生まれることと刑死すること、女王であることと罪人として裁かれることは確かに同時存在しえず、その意味では、それらが同じ時間的位置での出来事であると主張すれば、矛盾が生じるが、それらの出来事が継起する仕方では現象することは、ライプニッツ風に表現すれば、事実真理に属する真理であり、マクダガート自身の例のように、時制を含む文が必然的に矛盾を含むわけではない。「一千日のアン」に関する一連の言表には、概念的あるいは歴史学的に説明可能な諸変化とその方向の根拠が認められるだろう。これは、歴史的人物の事実存在した状態変化の問題なのであり、そこに時制は十分な基礎をもつのである。

以上のように、時間の哲学の一般的な諸論点を確認し、各論点に対する、ライプニッツの立ち位置を先取りする仕方でも或る程度まで述べたので、次に、本稿の主張と議論の前提と背景として、ライプニッツ＝クラーク往復書簡での「観念的存在」としての時間の位置づけを述べて、「現実的時間」が問題として浮上する文脈を明らかにしておこう。そのために、往復書簡で展開された物理学的時間存在論について手短かに触れておきたい(松田.2005a)。

万有引力の法則の発見で知られるニュートンの『プリンキピア』(1687年)は、デカルト、ケプラー、ガリレイらが代表する、初期近世の宇宙論、運動論の科学革命の結実とも言える記念碑的作品であるが、ライプニッツと、ニュートンを代弁した神学者、クラークとの往復書簡は、近代科学の確立過程での様々な論争を反映している。それは、時間、空間だけでなく、神の存在やその

有り方、科学方法論をめぐる路線対立から生まれたものである⁶。論争の直接のきっかけは、ニュートンが『光学』（1706年）で絶対空間に神の「sensorium 感覚器官」という用語を用いたことであつた⁷。両者の対立を図式的に示しておこう。

まず、(A) 神と世界の関係が争点となつた。世界が神に依存する点は変わらないが、依存の仕方をめぐり、ニュートンとライプニッツは理解が異なる。世界への神の介入、魂と神の物体性、主意主義と主知主義の対立である。次に、(B) 世界と物質の関係である。ニュートンは「空虚」を認め、原子を均質一様な絶対時間と絶対空間の中に位置させるが、ライプニッツは充実原理と物体の無限分割を認める点で対立する。そして、(C) 時間と空間の存在論。ニュートンは絶対運動と相対運動の区別に関わり、絶対空間と時間を要請する面があるが、ライプニッツの場合、モナドとその属性の個性から時間と空間の関係性および「観念性」を主張する。これが、本稿の問題の直接の背景をなす、時間と空間は独立の「絶対的存在」か、あるいは継起ないし同時存在の「秩序」か、という存在論上の問題である。

さらに、これに (D) 認識論上の対立が加わる。実験・帰納の科学方法論を説くニュートンと「抽象空間」のモデル形成を説くライプニッツの対立が見られる。ライプニッツも、運動記述の枠組みとしての時間と空間の存在を否定しないが、神による認識と人間による認識との差異を踏まえ、時間・空間の構成を論じる。最後に、(E) 力学固有の争点。これは、「力」の本性をめぐる問題として、遠隔作用としての引力と近接作用以外の力を認めない、機械論的説明の初期近世科学内部の相克に関わるが、さらに、力学の問題と自然科学と形而上学への充足根拠性の適用可能性の範囲の確定も問題となる⁸。

6 特に、両陣営の対立はホワイトヘッドやフッサールが問題にした「自然の数学化」をめぐる基本的スタンスの違いを表している。論争を泥沼化させた要因として、英国の王位継承問題などの政治的背景と微積分の先取権争いも挙げられる。

7 「統治」に関する自由と合理性の政治哲学的含意、「唯物論」「宿命論」「神」の主意主義と主知主義の自然神学の論争が絡み合っていた。

8 ニュートンの「力」は運動の原因である。慣性力は「固有力」であり、物質粒子に

問題の第5書簡は最後の書簡であるので、そこに至るまでの議論の流れを要約しておきたい。第1書簡は、ライプニッツが、英国の自然宗教の退廃を嘆くことから始まり、魂と神とを「物体」のように表象することと「神のセンソリウム」という用語法の問題点が結びつけられる。また、ライプニッツは神が世界に介入・修正する必要はない点を強調する。他方、クラークは神の「遍在」を強調し、ライプニッツの神が「世界外部の知性」であることを「宿命論」や世界の永遠化の原因として批判する。

ニュートンの場合、万有引力により神の普遍的作用を語るが、天体の周期運動が減衰するだろうという事実を踏まえ、世界への神の介入を語るかぎり、神は完全に世界を超越することはないのに対して、ライプニッツの神は、個体を完全概念に従い創造し、各実体が内発的に力を発揮するのにまかせる。このようにライプニッツの完全な「自動機械」である世界とニュートンの世界は対立する。これが自由と決定論の問題の一局面である。クラークから見れば、ライプニッツは、唯物論的決定論者であり、神の支配を世界から締め出す⁹。

第2書簡のライプニッツは、神の完全性を修正の要のない「予定調和」により確認する。もし修正が必要ならば、神は世界内の「世界霊」となるか、超自然的奇蹟が必要となるから、というのがその理由である。また、ニュートンのように、数学の原理＝哲学の原理のではなく、数学の原則としての矛盾律(同

外部からの作用が加えられない限り、前あった状態をつねに保持する(第一法則)。物質粒子に外部から力が加えられた場合、その外力に応じて運動は変化する(第二法則)。慣性は「受動的原理」だが、物質粒子は「能動的原理」によって動かされ、「能動的原理」としての「力」は隠れた性質ではない。粒子間に働く引力と斥力は「事実」として認められる。これに対して、ライプニッツの場合、物質が他の物質を押す(衝突する)力が基本となり、デカルトの「運動量」保存則に対する、活力保存則の問題系では、物質の「エネルギー」が問題となるが、「力」は形而上学的には、モナドの自発展開する力でもあった。ニュートンは、重力を「事物そのものを構成する自然の一般的法則」として探究した。

9 クラークは唯物論に対抗する「哲学の数学的原理」の立場を主張する。魂が、延長である身体と脳で像を通して相互作用すると言う(人間精神と神の精神との類比を主張)。しかし、物体自体は受動的で不活性であるとして、物体にある種の能動性を認めるライプニッツを唯物論と見なした。

一律) 以外に充足理由律を導入することで力学と形而上学の問題が解決できる
と言う。ライプニッツは、さらに、クラークの認識論、心身問題の粗雑さも指
摘している。表象像の脳内の現前だけでは、表象・認識の説明ができないとし、
「自覚的表象apperception」の重要性を述べる。最後に、ライプニッツは、ニュ
ートン＝クラークの神学を「ソシヌス派」——「三位一体」を否定したアリウス
主義の神は、自然の隅から隅までそして人間の歴史も支配・統治する神の意志
の絶対的支配を強調した——として批判する。これに対して、ライプニッツの
神は、「世界を超越した知性」である点が強調される。

他方、クラークは唯物論との対比で、数学的原理こそが形而上学の原理であ
るとし、ある物体がここにあり、別の場所に置かれたのではないことの充足根
拠は、神の「たんなる意志」でありうると主張する。これは、神の「無差別の
自由」、同質的な絶対空間と一様に流れる絶対時間の内部の質的な無差別の主
張と連動するが、これが、本稿であらためて問題となる、ライプニッツの「不
可識別者同一の原理」による、ニュートン＝クラークの批判と抽象空間の構成
を動機づけたのである。いずれにしても、クラークは神が認識論的にも事物に
対して「遍在」することによって事物を表象する、生きた知的存在であるとす
る。

ようやく第3往復書簡から時間・空間論が本格的な主題となる。ライプニッツ
は、根拠をもたない決定は充足根拠律と両立しないと反論し、空間を独立存在
とみなすことを批判する。空間は、時間が可能的な「継起の秩序」であるよう
に、可能的な「同時存在の秩序」に過ぎない。絶対空間・時間では時空の二状
態は不可識別であり、「なぜ事物が時間的空間的に現実と逆ではないのか」、そ
の根拠は必要ないし、一方が他方に優先されるべき根拠も与えることができな
い、とクラークを批判する。これに対して、クラークはこう反批判する。空間
が同時存在する物の秩序に過ぎないとしたら、「あそこではなくここに」物体が
位置する根拠は神の意志以外にはなくなるので、「同時存在する物の秩序」と
しての空間の絶対的実在性に反対する論拠はないが、現実よりも早い世界の創

造や世界全体の空間内の移動の想定がライプニッツではできないと指摘する。だが、ライプニッツは、続く第4書簡で不可識別者同一の原理に基づき、クラークのこの議論を批判する。ライプニッツの場合、時間の各状態——それは出来事を担う個体の存在を前提とする——は徹底的に個体的なものとして把握されることがここでもうかがえる。

第4往復書簡のライプニッツは、根拠をもたない、「たんなる意志」を「架空の矛盾したもの」と主張する（18節）。そして、意志による選択が、「無差別の事物」のあいだで生じることはないとして、不可識別者同一の原理と充足根拠律により「無差別の否定」を論証する（4節以後）。ここでよく知られた、二枚の葉っぱや二つの水滴の例が持ち出され、原子論を批判し、「別の場所や時間にある」宇宙の概念の虚構性の指摘（10-16節）が続く。さらに29/30節では神の認識と人間の認識の差異を指摘し、神が「物を創造することで知る」のに対して、人間精神は、神が与えた「外的なものの表現的原理」の力で事物を知ると指摘する。神が与えたこの「外的なものの表現的原理」——換言すれば、「生得観念」——の力により、世界の時間・空間的な全体とその状態変化の客観的で一義的な記述の枠組みを作ること、これがライプニッツの時間と空間の構成論の占める哲学的な位置なのである¹⁰。これに対抗して、クラークも物理学上の議論を展開し始める。つまり、ニュートンによるバケツの実験によって知られる「絶対運動」と相対運動の区別、宇宙の量的有限性、引力の位置、原子の存在など（13,45,46節）である。また、クラークは、開き直ったように、時間と空間とを神の属性として捉えると明言し、遠隔作用が「隠れた性質」ではない点も確認する（45節）。以上が、第5書簡の「前哨戦」である。本稿で問題となる、現実的時間の個性性と「不可識別者同一の原理」の連関もこのように予示されているのである。

¹⁰ これ以外に、奇蹟＝不正則な出来事という見方の批判のほか、動物の運動の機械的説明、粒子の充実と無限分割から分割された小部分のそれぞれが新しい生き物の全宇宙を含むという主張（21節以下）。現在の宇宙の物質の量をめぐる議論などが行われる。

最後に、往復書簡の時間論に関する研究には二つの流れがあることも指摘しておきたい¹¹。その一つは、それを[1]物理学の哲学として読解し、ライプニッツの時間論に、どの程度まで後のマッハやアインシュタインの先駆形態を見出せるか、を見定めるといふ、ライヘンバッハ以来の問いであり、もう一つは、[2]ライプニッツ哲学固有の問題として、ライプニッツが「観念的ideal」と呼ぶ、時間の論理・存在論的身分を「モノドロジー」にどう位置づけるか、というものである。[1]に関してはライプニッツが「絶対運動」、加速する「回転運動」の絶対性を適切に評価しなかった点について概ね見解の一致があり、その点のニュートン物理学の優位が承認されている。しかし、時間を独立存在と見なすことに反対するライプニッツの時間論の評価には見解の相違があり、ライプニッツの第5書簡53節での絶対運動に関するライプニッツの物理学上の難点を認めたとしても、「絶対時間」を否定する56節の論証から「不可識別者同一の原理」と「充足根拠律」に依拠する時間空間論には検討に値すべき存在論と認識論上の問題が残っていると筆者は考えた。

その際、物理学上の時間が「観念的」と特徴づけられる理路が重要となる。ライプニッツ研究ではその時間論をどう正確に解明し、「モノドロジー」に位置づけるかをめぐる意見対立があるが、この点を47節の「空間」——ここでは本稿とは異なり、その構成は「時間」の構成とパラレルと見なされている——の認識論的構成から解釈し、その意義を明らかにする必要があった。「不可識別者同一の原理」と「充足根拠律」が含む、認識の完全性要求は経験的な力学の構成にとっては、荷が重い反面、ライプニッツは、時間と空間に関しても、「個性」と「多様性」の洞察を維持しながら、しかも普遍性をもつ力学の基礎を構成しようとする点を論じたのである。

以上が、本稿の前提となる時間論の背景と議論である。特に確認しなくてはならないのは、ニュートンの「絶対的な真の数学的」時間の「一様性」ないし「同

11 本稿は、(松田.2005a)の続編の性格を有し、以下の5つの段落はその記述を借りている点をおことわりしておきたい。

質性」である。ニュートン自身は、それらを感じ覚的量、つまり経験的対象と区別し、時間については自然の時間に対して、一様で「外部の何ものにも無関係にそれ自ら流れてゆく」ことを特徴として挙げる。その導入を動機づけるのは、物理学による物体運動の一義的測定の保証であった。時間を精密に測定するための基準になるほど一様な運動は存在しないかもしれないし、どんな運動も加速か減速しているかもしれないが、絶対時間の進行、「持続」だけは何の変化も受けず、運動が速かろうが遅かろうが、あるいはなかろうが、いつも同じと考えるのである。しかし、このような時間と空間は認識不可能で存在しない、とライプニッツは批判した。その意味で、絶対時間と空間は、ライプニッツが、1705年10月11日のデ・フォルダー書簡で示唆したように、「実体的ではなく、何か観念的なもの」(GP11.278)なのである。このことは現実的時間の存在を考察するうえで重要である。

注意しなくてはならないのは、ライプニッツが、完全に同じ二つの水滴の存在を否定する時、その想定は不可能ではないが、「神の知恵に反する」(25節)として、「不可識別者同一の原理」を事実真理に関する充足根拠律と関連づけた点である。「数ノ上デダケ異なっている事物がある」(GPVII.395)と主張する原子論者に欠けている、上位の論理がこの原理であり、充足根拠律なのである。逆に言えば、「完全に不可識別な二つの事物」が現実存在したら、それらは二つであることを認めなければならないだろうが、この仮定そのものが誤りであり、根拠律に反する以上、「数ノ上デダケ異なる事物がある」とすれば、それらは「観念的」なものに他ならないと考えるのである。このように不可識別者同一の原理を時間と空間へ適用することでライプニッツは、互いに識別できない二つの事物の「観念性」を帰結させる。

この意味で、数学的に構成された空間と場所の諸部分は、それ自体は「観念的」であり、二つの抽象的単位の様式で「同じ」——正確には「同値」——なのである。こうして絶対的時間の均質一様性と具体的時間の個性性を対比し、また、その対比の根拠を確認することができる。個体の観点から「無差別の時

点と場所」は、現実の時間と空間ではないことを主張し、絶対時間は、位置や関係に関する個体的な差異を「抽象」し、「可能的秩序」として構成されたものであることを示したのである¹²。しかし、数学的時間を「同値」と考えることに満足できないものが、それを「同一物」と考える誤謬を犯すのである。時間と空間を変数とする座標空間は、多様な運動の軌跡を写像し計算可能にするが、絶対時間と空間は、関係や量のような「数において」、同値性の保存による置換則が成立する数学的存在ではありえても、個体、つまりライプニッツの意味の实在ではないのである。

2. 「現実的時間の個性性」と「不可識別者同一の原理」

ここでの考察を、ライプニッツが1715年のクラーク宛第5書簡27節で次のように述べていることから始めよう。

時間と場所の諸部分はそれ自体としては観念的なものです。ですからそれらは、二つの抽象的な単位と同様、完全に互いに同じようなものなのです。しかし具体的な二つの一、あるいは実際の二つの時間ないしは満たされた二つの空間、言い換えれば真に現実的なものについては話が違います (GPVII.395. 傍点松田)。

これまで述べてきたことから、ライプニッツの引用した発言の意図はかなり汲み取れるに違いない。また、これに関連して、同書簡の49節では「瞬間」に関する注目すべき発言が見られる。それは、「瞬間」を「観念的」なものとしての時間と空間とに対比したうえで、それを「時間を構成するが、その部分ではないもの」として位置づける。

12 全書簡のなかで最長の47節 (GPVII.400ff) は、空間の構成として「場所の同一性」と位置関係の「同値」を論じるが、その議論は、時点の同一性と時点間の関係の「同値」の構成にも妥当すると見られる。これに『数学の形而上学的基礎』(GMVII.20)などの「構成」を加えることで、時間の間隔の関係の同値集合として「時点」とその無限集合の同質的時間が構成されることになるだろう。

時間というものの、そして持続durationというものの内で現実存在するものはすべて、継起的なものですから、連続的に減びています。だとすると厳密には現実存在しない事物が、どうして永遠に存在し得るでしょう。そのいかなる部分も現実存在していないような事物がどうして現実存在しうるのでしょうか。時間というものの内で現実存在しているのは瞬間だけですし、瞬間は時間の部分でさえありません。こうした観察を熟考してみる人なら誰でも、時間は観念的な事物でしかありえないことがよくわかるでしょう。そして時間と空間との類比でも両方とも等しく観念的であることが申し分なく判断できるでしょう（GPVII.402）。

一般的に言えば、ここで触れた、「現実的時間」と「瞬間」に関する、ライプニッツの書簡での二つの主張は、「絶対空間」と「絶対時間」の論駁に比べれば、周辺的でそれほど関心をひくものではない（Arthur.283. Breger. 49, Leibniz. 1991.160）。しかし、ライプニッツが時間の精妙な問題に触れたことには十分な理由がある。この点に注目し、現実的時間と瞬間そして「時制」の問題をライプニッツ晩年の文脈から考えよう。この場合、時制の問題は、一見したところ、現実的時間や瞬間と無関係に見えるかもしれないが、すでに示唆したように、ライプニッツが「単純実体のあらゆる現在の状態は、それに先行する諸状態の自然な帰結であり、それはその現在が未来を孕んでいるのと同様である」（GPVI.610）と述べ、過去、現在、未来を、モノダの存在から「連続する」ものとして位置づけていることは否定できない——その「帰結」としての有り方は、マクダガートのように「位置の系列」というだけでは不十分である。

事実、研究者たちも「エンテレケイア」ないしは「精神的自動機械としてのモノダ」の「内的原理」から時制の存在論的位相を把握してきた。ライプニッツからいったん離れて考える場合でも、過去、現在、未来のような時制は、「人間的時間」——マクダガートの言う「A系列」の時間——として、「B系列」の時間——日付として記録できる事物の「前後関係」ないし出来事の継起より

も、私たちによりみぢかなものとして経験されている¹³。しかし、ライプニッツの「現実的時間」の哲学は、マクダガートの時間論とは異なり、時制を含む文の真偽に関連する「真理条件的意味論」や「truth maker」理論の枠組みでは扱い切れないし、フッサールの「内的時間意識」の現象学やハイデガーの「現存在」の時間性の実存論的存在論にも帰着しない。これから見るように、その本来の問題は、「現実的時間のモノドロジー」の存在論的次元にある。以下では、この問題が「不可識別者同一の原理」の時間への適用である点を具体的に（再）確認するところから始める。

時間の問題に関連して、ライプニッツは「不可識別者同一の原理」を二とおりの仕方で使用する。この原理は文字どおりに理解すれば、[1]「互いに識別できない二つのものは、同一である」と表現されるだろうが、「同一性」の意味をめぐる紛糾と論争とを避けるならば、ライプニッツの言い方では「同一的」は、実際は「同値的equivalent」や「類似的similar」と言う用語のほうが適切な場合がある点に注意が必要である¹⁴。つまり、ライプニッツ自身は、記号や文の「置換可能性」が問題となる「普遍記号法」ないしは形式論理学・論理演算のテキストを除けば、この原理を通常、[1]のかたちではなく、『第一の真理』のよく知られた定式[2]「自然のうちにはただ数的にのみ異なる二つの個体的なものは存在しえない」（C.518）で表現している点に注目したい。

この意味で、[2]は[1]の「対偶」として読むことができるが、ここで強調しなくてはならないのは、基本的には、[2]の指示項の範囲が、「自然」内部の「個体」群である点である。それを肯定的に表現すれば、「自然のうちにあるものはすべて、数的な諸属性以外でも、互いに識別できる」となるだろう。したがって、「不可識別者同一の原理」の真意は、この識別可能性が人間の有限な認識

13 ライプニッツの場合、マクダガートの「C系列」に対応するものがあるとするれば、それは個体概念が内含する「事物の系列」として論じることができる。これらの問題群も含め、Futch.2008,2012などからもライプニッツの時間論の豊かな題材が得られる。

14 現代論理学の基礎を与えた、フレーゲの「概念記法」以来、ライプニッツ研究でも原理の解釈問題（Fichant.1998. 291ff.松田.2005b）がある。

能力でなく、むしろ「神の知性」に見いだされうる（と考えられる）かぎりは、認識論的でも論理的でもなく、存在論的であり、その自然神学的な含意にある。この点は、不可識別者同一の原理が『第一の真理』で充足根拠律から論理的に導出されることに示されているとおりでである。事実、ライプニッツの場合、この「同一性と差異」の典型例は、或る生物「種」の実例の個別性に関わるが、それは、或る生物種の各個体が、時間的空間的に「いつ・どこに」位置するか以外に、必ず「互いに識別可能な質的差異」を有するというものである——これに関しては、ライプニッツが仕えた、ハノーバーの王宮のヘルンハウゼン庭園でのまったく同じ二枚の葉っぱを探すという、宮廷の遊びの挿話が有名であるが、そのような葉は見つけることができなかつたとされる。ライプニッツは、物理学の場合でも、個々の物体運動に、それが描く幾何学的な軌跡以外にも、そのような差異がある、と主張したのである。その意味で、往復書簡の幾つかの重要な地点でライプニッツは、「不可識別者同一の原理」の二つのヴァージョンないし使用に訴えている。

まず、第5書簡55節では[1]が、ニュートンの絶対時間が、宇宙の出来事や物体運動から独立の実在性を有する点を反駁するために、文字どおりの仕方で使用される（GPVII.404）。それは、すでに触れた、クラークの思考実験に関わる。第3返書4節の「神による世界創造が実際に生じたよりも数百万年早く起こっていたら」¹⁵という仮説に対して、ライプニッツは、[1]を適用し、その場合、出来事間の「確定した順序」に言及できないならば、仮定には意味がないと断じたのだった。つまり、現実には創造された宇宙の出来事の系列と想定された宇宙の出来事の系列を互いに識別できないとき、[1]に従えば、二つの宇宙は、実は「同じもの」になる、と言うのである。「不可識別者同一の原理」のこの否定的使用により、一定の出来事とその確定した順序から独立に有るよう

15 クラークの場合、絶対時間のなかで異なる時点を占める、二つの宇宙は（神には）識別可能であるが、ライプニッツは絶対時間を認めないので、そのような識別は不可能である。

な「実体的」な時間は存在しえない、という結論が下されたのであった。

他方、不可識別者同一の原理の肯定的使用が、現実的時間の、「瞬間R」とその「系列」に帰着するが、存在論的個性ないし数的差異の存在の正当化である。第5書簡47節での物理学のために構成された、数学的空間は、あらゆる幾何学的図形を不変項的に変換することを通して得られる「点の無限集合」として、あらゆる個別的・具体的な空間・時間と置換可能であると見なされることから、絶対空間と絶対時間の「代替者」となる（GPVII.400ff.松田.2005a.68. Vailati.114ff）が、そのときに、これとは対照的な、本稿冒頭の詩句が暗示する、現実的時間の置換不可能な存在論的個性が浮き彫りになる。しかし、ライプニッツのこの主張は、ライプニッツ＝クラーク往復書簡では触れられただけにとどまっており、主張の論拠も提示されていなかった。

とはいえ、明確なことは、ライプニッツが26節で時間と空間にも「個体化の原理」を導入した後、27節で現実的時間が問題となり、「絶対時間」の「観念性」ないし置換可能性と対立するものとして、現実的時間としての「瞬間の個性性」を際立てた点である。絶対時間は、物質とも出来事とも独立に、無差別かつ一様に流れるが、この古典力学的・数学的時間に対して、現実的時間の個性性が強調されるのである。ライプニッツは、続く28節で二つの時間の瞬間が私たちには識別不可能である、という理由で、それらを同一物と見なせば、それは、「存在論的誤謬」である点も指摘する。このように、ライプニッツは瞬間の個性性を主張するが、そのことは、瞬間を現実的時間と同様の「質的」で置換不可能な性格をもつものと見なしたことを示唆するだろう。

3. 「モノド内部」の現実的時間：「関係性」と不可逆性

第5書簡49節のライプニッツは、瞬間が、時間の「部分」ではないが、時間の「基礎」と言う。この主張は、通常の「外延主義的メレオロジー」から見れば、一見したところ逆説的である。「外延主義的メレオロジー」では、物質的原子が物体を合成するのと同じ仕方で、幾何学の点も或る直線全体の離

散的部分であると考えられるからである。しかし、ライプニッツは「連続体合成の迷宮」から逃れるため、「物質の部分全体関係」および「幾何学の部分全体関係」とは異なるタイプの部分全体関係を「瞬間と時間」の関係に見るのである¹⁶。それが「部分ではなく基礎」としての瞬間である。言い換えれば、瞬間は、物理学の文脈に属する、「活力保存」と「運動の連続性」の問題に関連して、ライプニッツがはっきり批判したように、デカルトの時間論の場合と異なり、何か「原子的な存在者」ではなく、時間全体の構成とこの世界内の出来事の継起に対して、語の本来の意味で「モノダ的存在」である、と考えなくてはならないのである。互いに独立の無数に多くの幾何学的な「時間点」から合成される宇宙の「通時的連続性」の理論上の困難に直面した、ライプニッツは、幾何学的な点から「時間直線全体」を合成する困難を避ける独自の「メレオロジー」を構想する。しかし、瞬間が時間の部分であることを否定する一方、「瞬間がなければ時間も存在しない」以上、瞬間は「時間の基礎」である、とたんに主張するだけではまだ不十分である。時間的連続体の構成問題は説明を必要としている。

ここで重要なのは、現実的時間の問題を物理学の時間の問題から注意深く切り離すことである。ニュートンの絶対時間は、その「内部」に有るものがすべてなくなっても、独立して有り続けるが、ライプニッツはそこに絶対時間の「観念性」を見て、クラーク宛第5書簡47節で絶対空間の「代替者」を構成して見せたのであった。ライプニッツは、絶対時間も同様に構成可能と考えたと推測されるが、瞬間を個体的な「現実的時間」として捉えただけでは、絶対的な空間と時間の構成論・存在論上の類似性が保証されるわけではない。なぜなら、現実的時間の連続性は、ニュートンの絶対時間の均質様な連続性とはまっ

16 このメレオロジーのタイプとその使い分けについては、「われわれは観念的なものを実在的実体と混同して可能的なものどうしの秩序の内に現実的部分を求め、現実的なものから成る寄せ集めの内に不定の部分を探し、連続体の迷宮や解き難い矛盾へと落ち込んでしまう」と言う、1706年1月19日デ・フォルダー宛書簡（GPII.282.松田.2012）のコメントを参照することが求められる。連続する直線や曲線で表現されるような、物理学的な時間もこの意味では「観念的」なのである。

たく異なるからである。というのも、瞬間——「瞬間R」——は、物体にとっての原子、線分にとっての点——「瞬間G」に対応する——と類比的に表象することも、概念把握することもできないからである。そこには、「不可識別者同一の原理」に従う（べき）、現実的時間の個性性、「質的差異」があるはずだからである。ニュートン力学の場合は、速度や加速度のような、運動の諸量を精確に測定するため、時間は、デカルト座標の各点 t ——幾何学的な点としての「瞬間G」——のような同質性ないし均質性を持たなくてはならなかったが、各瞬間、つまり「瞬間G」の現実的時間の系列に対する関係は、幾何学の点の線分——「単位」と「全体」——の関係と類比的ではない。つまり、後者の部分全体関係は同質性ないし同属的¹⁷であるが、前者のそれは、以下の1716年のブルゲ宛書簡のように、そうではない。

瞬間と単位の比較に関して言えば、単位は、単位よりも大きな数の一部分であることを私は認めるが、瞬間は本来の意味では時間の一部分ではない。なぜなら少なくとも数学者のスタイルでは、全体と部分は同質でなくてはならないからである（GPIII.591ff）。

この主張は、ライプニッツ自身の存在論的用語で言い換えることができる。つまり「瞬間」——ここでは「瞬間G」と区別されるべき「瞬間R」——は、或る独特の連続体としての現実的時間の「要件」なのである。この場合、「要件」は、『定義集』では、存在者の「依存」ないし「非依存」の動的位相を表現する一連の術語の一つとして用いられている。それは、「本性的に先行する仕方 *natura prius* で何かを依存させるもの」（C. 471）¹⁸と定義されるが、さらに「構成するもの」を、幾何学上の点——「瞬間G」——の線分に対する関係をモデ

17 運動学的な含意をもつ「同属的 homogonus」については（松田.2005a.70. GMVII.20）を参照されたい。

18 事実、1706年のデ・フォルダー宛書簡では、部分全体の「自然な先行関係」（メレオロジー）の基準から存在者が三分されている。つまり、1.全体が部分に先行する「線分と点」の幾何学的関係と2.部分が全体に先行する「物体的関係」があり、3.「単純実体と合成体」の「非同質の関係」が前者二つと区別されている。

ルに「直接的要件」として説明する。そこでは「点」は「部分」でなく「構成するもの」なので、ライプニッツ＝クラーク往復書簡の言葉遣いと齟齬をきたす恐れがあるが、「線分が点なしには存在しえない」ことが確認できる——これは、すぐ述べるように、幾何学上の点としての「瞬間G」にも言えることである。

幾何学の点自体の存在には、その物理的・物質的意味と精神的・観念的意味の二重性から来る、曖昧さが残るものの、ライプニッツが「単純実体としてのモナド」を「幾何学的点」や「物理的点」と対比して、「形而上学的点」とも呼んだ（GPIV.483）以上、部分と全体の存在論的關係の観点からの、幾何学上の点の定義は「現実的時間としての瞬間」の存在を理解するうえでも助けとなる。他方で、ライプニッツが幾何学の線分では、全体が「観念的/数学的に」部分としての諸点に先行するとしたことも明白である。これは、示唆したように、線分の無限分割と点からの線分合成が抱える難点、いわゆる「連続体合成の迷宮」に陥ることを避けるための「逃げ道」であるが、個別的に紙や黒板に書かれる、線の「トークン」をものとして見れば、作図で「点」が物理的に「線」に先立つことは否定できない。このように、幾何学の点は存在と原因の二重の観点で限定されている。

しかし、厳密な意味では、「観念的で拡がりのない点」と比較するとき、瞬間——「瞬間R」——は「観念的」ではなく、現実的時間に対する「要件」である。この違いを明確にするために、さらに『定義集』の存在論的概念二つを用いることができる。一つは、「それを措定しないと、他のものが措定できない」という仕方で「依存させるもの *suspendens*」であり、もう一つは、「それが存在するために何も必要としない、独立しているもの *independens*」である。すぐに気づかれるように、二つの存在論的概念は、独立したモナドが、「寄せ集めとしての物体」を自らに依存させる仕方を具体的に語るのがたとえ困難で

あるとしても¹⁹、モノダの存在を特徴づけることはまちがいない。つまり、「形而上学的点」としての「モノダ」が「独立存在」であり、かつ「依存させるもの」であるのに対して、幾何学上の点は、確かにトークンとして見れば、「部分」であり「点がなければ、線がない」としても、観念的であるかぎり、やはり独立存在しない。それは、観念的存在であるかぎりの線分の「要件」にとどまる。したがって、次に問題になるのは、モノダの以上の二規定を踏まえ、瞬間——「瞬間R」——を存在論的にどう規定するかである。そして少なくとも現時点でも明確なことは、「瞬間R」が構成的な意味で現実的時間の要件だということだけである²⁰。

事実、モノダと瞬間には存在論とメレオロジーの両面で類似性がある。したがって、ここではモノダをあえて「現実的かつ観念的」なものとして特徴づけることもできるだろう。この場合、「要件としてのモノダ」の現実性は、「エンテレケイア」としていつもすでに働いている「活動性」から理解され、その活動は、たんなる論理的可能性や能力の潜在性と区別される。他方、モノダの「観念性」は、誤解を恐れずに表現すれば、(定義上、「部分」を持たない)「モノダ」が、その「諸部分」に先行する「全体」として固有の連続性を有することを意味する。このような有り方については、さらに説明が必要であるが、重要な点は、モノダの「活動性」とこの「観念的な連続体」の部分に対する「本性上の先行性」の確認である。「瞬間R」も、モノダと類比するならば、同じような特徴をもつだろうと予想されるが、「瞬間R」が、「全体」として「本性上の先行性」を有すると述べるとすれば、それが現実的時間の「全体」に対してもつ関係がどのようなものかはまだよく分からない。

「瞬間R」のこのような存在論的複雑性を解きほぐすため、現実的時間の連

19 これが、歴史的にはライプニッツに続く、ヴォルフやカントが心的存在としての「モノダ」を捨てる理由となったことはよく知られている。

20 ベーメも「モノダ」が、この意味でもはや背進不可能なものであることを指摘している(Böhme.246)が、説明上の「要件」として「独立存在として依存させる」ものとして語りうる「瞬間R」の存在にも同じことが当てはまるように思われることは避けがたい。

続性を、瞬間相互の「関係性」ないし「内的結合」として理解し、それを数学的に構築された幾何学的・観念的連続体——「瞬間G」はそこに組み込まれる——と区別したい。実際、ライプニッツは、前者、「瞬間R」の連続性を特徴づけるため、「共同要件」(AVI.4.1800)の概念を導入し、それを「表象活動の連鎖*nexus*」(GP11.370. Bolton.116)などと言い換える²¹。「モノドロジー」の枠組では、「瞬間R」のこの連続性は、各モノドが有する「モノド内部」の諸関係として規定されるだろう。実際、モノドは、互いに因果的・存在論的に独立でも、『モノドロジー』56節が述べるように、「相互に観念的に表現し合う関係」を有する以上、「相互の共同要件」なのである(GPVI.616)。「相互の共同要件」という「メレオロジカル」な規定は、現実的時間としての「瞬間R」相互にも妥当する。そして、これは「瞬間の連鎖」としての現実的時間には「空虚」が存在しないことを意味する。これに近いことを、ライプニッツはすでに1676年に、いわゆる*Summa Rerum*で時間と空間の違いを述べるときに「不可識別者同一」の原理に言及することなく述べていた。つまり、二つの瞬間的状態のあいだには空虚はない。言い換えれば、どの二つの瞬間も互いに接触しているとしていたのである。

時間と線分とのあいだには大きな違いがある。二つの瞬間的状態のあいだの間隔は、そのあいだには何も挿入されないのであるが、けっして限定ができない。…空間は、たとえば、地球が内部では空虚であるとするれば、そうではない。時間のなかにあるものは、そこには何も挿入されないものであるが、接触している *se tangunt* (AVI.3.584.Parkinson. 1992.108)²²。

では「モノド内部の関係」は「表象活動の連鎖」という規定で尽くされるの

21 「襲」(GP1V.475)や「事物の系列*series rerum*」(GPVII.303, GPVI.445)なども同種の表現である。

22 「時間は事物の秩序なしには存在しない以上、何か絶対的なものではない」(GP11.510)と述べる1716年のデ・ボス宛書簡にも見られるように、時間論の場面でも「充実原理」が問題となる。

だろうか。また、「相互の共同要件」の規定は、それが「瞬間R」の連続を説明するとすれば、それで十分なのだろうか。これらの問いについて、ライプニッツが与える手がかりは、瞬間——「瞬間R1」——が後続する諸瞬間——「瞬間R2,R3,...Rn」——に対し、本性上先行することが、「瞬間」を点から区別することである。ライプニッツは、宇宙の「最初の瞬間」を議論する1715年のブルゲ宛書簡で「空間としての宇宙の諸点」にはそのような先行[優位]関係がない、と述べ、次のように続ける。

諸瞬間と諸点のあいだに違いがあるのを私は認める。つまり、宇宙の或る点は、他の点に対して本性上、優位にあることはけっしてないが、瞬間は時間に関してだけでなく、後続する瞬間の本性に関してもつねに優位にある(GPIII.581)²³。

この書簡では、神の世界創造の問題の文脈で、本性上の先行・優位関係としての「モノド内部」的關係が、連鎖的な限定・被限定の関係をもつことが指摘されている。トリビアルに思えるかもしれないが、どの瞬間——「瞬間R」——もそれに「先行する」諸瞬間によって限定され、また後続の瞬間を限定するのである²⁴。諸瞬間もしくは、宇宙全体の出来事の限定関係ないし「順序」は、しばしば指摘される、ニュートン物理学の時間点の「可逆的順序」とは対照的に「不可逆」なのである。

この連鎖を「モノド内部の歴史」と見ることは、『叙説』のカエサルやアレクサンダー大王のような個人の、この世界での「すべての軌跡を限定する個体の完足概念」(GPIV.433)という、ライプニッツの構想からすれば、違和感を抱かせるものではない。あるいは、それをあえて「モノド内的な因果性」と表現することが許されるなら、それは、私たちの有機的=器官的身体——形而上

²³ この往復書簡の議論の問題は「確定した値」を持たない「無限小」の数の位置づけである。

²⁴ この意味で、ダメットが提起した、現実的時間の逆転可能性のような問題はライプニッツにはない。

学的にはより小さなものの「寄せ集め」や人工的機械としての物体と区別される——に或る種の自己同一的「実体性」を与えるものとして、ライプニッツが復権しようとした「実体的形相」の概念にも見いだせる。「モナド内的因果性」は「テセウスの船」のモデルで表現されるような状況、言い換えれば、「質料」としての身体の「不断の流動」のなかでも、その活動の連鎖により、身体に「心的な生氣」あるいは「形相」を与え続ける（AVI4.994ff.AVI.6.231）のである。この過程は、個体概念ないし実体形相の実現の「目的（原因）」から見れば、現象的には「後退と前進」があるように見えるとしても、不可逆なのである²⁵。

したがって、ライプニッツの現実的時間の存在論は、それが「モナド内部」の瞬間と連鎖の不可逆性を強調するかぎり、すでに見たような、現代の代表的な二つの時間論——マクダガート以来、両理論は互いに相容れないとされる——と一定程度、両立可能であると考えられる。つまり、時制の「実在性」を主張するA理論と「前後関係」の順序の、時制に対する優位を主張するB理論を言わば「包摂」するのである。この問題はさらに検討を要するが、瞬間——「瞬間R」——とその連鎖、連鎖の方向と不可逆性を、他の二つの時間の位相——Aの時制の位置系列とBの前後の継起的関係——に存在論上先行する次元として位置づけることができるのである。そう理解できるとすれば、さらに、クラーク宛第5書簡49節の「現在主義」風のライプニッツの見解も表層的なものに見なし、『モナドロロジー』22節の時制の「実在論」とも折り合いをつけることができる。つまり、私たちが日常生活で時制や時制付きの出来事についての文を使用している、それらが、A理論的でない記述に還元でき、書き換えられるならば、それらは、実は「規約的なもの」に過ぎず、本当は、時制としての時間」は存在しないのだ、と主張する哲学者が確かにいるとしても、ライ

²⁵ ライプニッツの「完全原因」の見方は、個体の内部に含まれる、複数の傾向性のあいだの葛藤や競合そして何らかの統合——選択や意思決定——の状況としても語ることができる「モナド内的な因果性」にも妥当するだろう（松田.2010）。

プニッツは、時制には「十分な基礎がある」と主張できるのである²⁶。

また、ライプニッツは、部分的には確かに「時間の因果的理論」に当たるものを述べてはいるが、瞬間に、その活動性と同時に、「自己展開」する、モノドが有する、過去、現在、未来に渡る、時制的な「潜在性」の位相も見ている。形而上学的に言えば、諸時制の二次的な「實在性」が「モノド内部」的かつ不可逆の関係に十分な基礎を有するとし、それらの時制が、たんに意識された「心理的」なものではない、とライプニッツの時間論でも言うことができるのである。この意味で、ライプニッツは、「現在主義」のように、過去や未来の實在を疑うことはない。過去や未来は、幻想のようなものではなく、その現象やそれに関する認識と言表は、それぞれの視点に条件付けられはするが、モノドないしは「瞬間R」の連続性のうちに「よく基礎づけられた現象」なのである。このことは、人間の場合、神のように宇宙に「時間的にも遍在し、時制を有さない」有り方とは異なり、記憶、期待そして微小表象のような多様なタイプの表象によって「表現」される²⁷。したがって、ライプニッツの「時間の関係主義」の存在論は、絶対時間の「数学的代替者」の構成論には尽きないものを含んでいる。その存在論は、表象活動の「源泉」(GPII.504)として「エンテレケイア」の「自発性」を基礎とする現実的時間の「モノド内的な関係主義」なのである²⁸。瞬間も、それが実現すべきものに向かう、優位な傾向性によって現れ、その内実は或る瞬間の或る特定の視点から記述される存在なのである²⁹。

26 この意味で時制の（「真理条件意味論的」な言語哲学の埒内にある）「truth maker」的アプローチとライプニッツの時制の存在論も同じではない（Futch.2008.131ff）。

27 「神の場合、永遠の概念が時間の概念とまったく異なるのは、前者が必然性、後者が偶然性に存するからである」（GPIII.588）。

28 レ・ベドウィンなどの現代の時間論との連関で、事象の時間的諸系列の唯一性、相互の非置換性を強調する「時間の本質主義」を論じるFutch.2012は、時間空間的位置のような「外的な命名」の次元でも、他の関係項との諸関係に基づき、時間的空間的のものや出来事を識別し、それらに個性性を帰属させることができる点を示している。現実的時間の「モノド内の関係」はこれを否定するものではなく、むしろ基礎づける（松田.2005a.68）。

29 Anfrayは時間の「非対称性」ないし「時間の矢」に関するルイスとライプニッツの反事実条件法と可能世界からのアプローチの異同を論じている。事象系列の分岐や

4. 弁神論時間：神は「下手なキタラー弾き」ではない

「互いに識別できないものが同じである」ことを否定的に論証した「不可識別者同一の原理」を、ライプニッツは各瞬間——「瞬間R」——の個性性を示すために、積極的に使用し、不可逆の現実的時間を「モノド内の関係」として具体化し、歴史と宇宙の「進化」を語る。最後に、現実的時間の関係主義の実相にさらに迫るために、ブルゲ宛書簡、『弁神論』、『万物回帰』に見られる、ライプニッツの「時間的弁神論」の歴史哲学と「発展的進化」の生物哲学に触れたい。そこに登場するホラーティウスの「キタラー弾き」のライプニッツによる隠喩的使用も手がかりにしよう。

ブルゲ宛書簡では宇宙の発展に関する3つの仮説ないしは幾何学的モデルが取り上げられている点に注目したい。その論証の目標は、世界が存在する、充足根拠を示すことであるが、それは事実から分析を通して与えることができると考えられている。ライプニッツによれば、この根拠は、世界に最初の瞬間のようなものがないとしても、必ずしも矛盾はないことから、論理的には「偶然的」なものである。「現実的時間の関係主義」を理解するうえで、重要な点は、ここでライプニッツが、暫定的な結論すらも導いていないとはいえ、道徳的な意味でも、世界の「完全性」を増加させるような、世界の発展の可能性を探索していることである。

2つの仮説を立てることができる。一つは、自然はつねに等しく完全である、というものである。もう一つは、それはつねに完全性を増大させている、というものである。もし自然が変化はしても、つねに等しく完全であるならば、始まりが存在しないことがより確からしい。とはいえ、それはつねに完全性を増大させているとすれば（この場合、自然に一度に完全性を与えることは不可能であると想定されているのだが）、事態はさらに二と通りの仕方

再収斂の論理的可能性を認める、ルイスに対して、アンフレも、ライプニッツの場合、あくまでモノドの「自己活動性」に由来する「自然な先行性」が時間の「非対称性」を特徴づける点を論じている（Anfray.92-99）。

明できるだろう。つまり、双曲線Bの縦座標によってか、三角形Cの縦座標によってかである。双曲線の仮説に従えば、始まりは存在しないし、世界の諸瞬間ないしは諸状態は、永遠につねにその完全性に関して増加する。しかし、三角形の仮説に従えば、始まりは存在するだろう。等しい完全性の仮説は、長方形Aの仮説となるだろう（GPIII.582.松田.2017.47）

ライプニッツが、曲線が漸近線に「無限」に近づく、双曲線の仮説Bを好むと推測するのが自然であると思われるが、それは、この無限小を含むモデルが、世界が前進的かつ「無限」に完全性を増加させる点を認識させやすいからである。実際、別の草稿はBの場合、現実的時間の軌跡をモデル化し、曲線の表面が均質でないとする（AVI.4.1642ff）が、このような無限小、屈曲、飛躍は弁神論の着想と適合的である（Rateau. 85ff）³⁰。そして、自然史の途方もなく長い時間の経過から判断すると、この過程はライプニッツの場合、或る種の「発展的進化」の過程として「先決定」されていると見なされる。実際、ライプニッツ＝クラーク往復書簡と時期を同じくする、ブルゲ宛書簡では「理性的動物」の発生が話題の中心の一つなのである³¹。

ここで再び生物学的個体とこの世界の現実的時間に「不可識別者同一の原理」が適用される。それは、現実的時間の方向と、出来事生起の「前後関係」としての可能な「継起の順序」——同時性の秩序としての空間と一対であるとされる数学的時間——とを同一視できない以上は、現実的時間であるかぎりの、瞬間と時制は、モナド論的・価値論的に解釈されなくてはならないことを

30 フィションは軌跡を（エピソード）サイクロイドとして捉える（Leibniz.1991.109）。中心の大きな円の周囲の軌道を周転円が回るとき、二つの円の交点が描く軌跡は、現象的に前進と後退を繰り返す点で、円の自発的回転と現象する点の運動の軌跡がモナドの存在の動性を特徴づける点で興味深い。この自発的に回転する周転円のモデルは「水力・空気・火力の機械」としての生物に関して、一定の或る向きをもって生物が自発的な渦動から生成するという隠喩とも重なる（松田.2018.a.c）。

31 ライプニッツは、書簡でもブルゲに応じて、卵と精子の発生上の役割に関する論争に関する批評もしているが、生命の「変形過程」の途方もない長い時間に関わる、古生物学をライプニッツ自身も研究した（GPIII.564ff, 578ff.Matsuda.2016a）。

意味する。つまり、厳密な意味では、一つ一つの瞬間は、互いに類似していないし、その「唯一性」のゆえに、けて同じ内容が繰り返されることはないのである。しかも、このことは「価値的」にもそうなのである。これが歴史の問題として論証されるのが『万物回帰』であり、自然史としても示されているのが『弁神論』である。

前者の文脈は、(周期的に回帰する「プラトン年」を認める)ストア派や(異端とされた)オリゲネスの「永遠回帰」思想に対する、ライプニッツの「結合法」思想の適用による検討とその「否定」である³²。後者の文脈は、発生の「不正則」事例の位置づけに関わり、両者でホラーティウスのキタラーの句が隠喩として援用され、「不可識別者同一の原理」が働く点が興味深い。前者の論証の前提は、結合法の着想と歴史の記述であり、人類の存続の有限性である。

この前提のもとで、まず、ライプニッツは、国家の歴史と個人の歴史がいつかは回帰する——「すでに語られなかったことはなにもない」——ことを、本稿最後の[補足]に挙げている、国家史に関する[想定1]と個人史に関する[想定2]に基づき論証する。しかし、その後、議論を反転させ、結合法的計算だけでは、或る個人の歴史が正確に反復されるとは言えないとする。その理由は「他の多くが繰り返されても、必ずしもすべてが繰り返されるのではない」(Leibniz.1991.72) というものである。ライプニッツは、形而上学的に言えば、「現在が未来を孕む」ことは確かなので、多くの世紀が繰り返される、と推論できるが、しかし、それは、「すべての点で完全に同じこと」の繰り返しではない、と結論する。歴史には「たとえ感知できないとしても、どんな本も十分には記すことができない区別がつねにある」と述べる——こうして永遠回帰説は否定される。

32 ライプニッツが回帰思想について考察することになった、直接の歴史的背景については、フィッシュンが(Leibniz.1991.15ff)の序論で詳細に説明しているが、問題は、若いライプニッツが傾注した、結合法的思考法と魂の「救済」に関連する、周期的な永遠回帰の思想との結びつきであった。オリゲネスの「最終的にはすべての被造物が救済される」という思想が、同時代の「千年王国論」——キリストの再臨を含む——との関連で議論の対象となっていたのである。

ここでライプニッツが依拠するのが「連続するものが部分に現実^に無限分割されていること」(傍点、松田)である。それが、世界の物質のどの部分にも無数の被造物があり、これを記述する本をどんなに長くしたとしても、それをすべて完全に記述することはできない、という主張を支える。ここからライプニッツは、「原子論」も批判する。もし物体が原子の集まりから成り立つなら、新しい原子が他の原子と混合しないかぎり、すべては、原子の同じ集まりにより、反復されるだろうが³³、「原子論の描き出す世界」は、完全に認識可能な程度の有限な完全性しかない「機械」にとどまる以上は、「真の世界」ではありえない、と言う。こうしてライプニッツは、「回帰」を繰り返しながら、たとえ私^{たち}には感知できなくても、世界は「順に少しずつより善いほうに向かう」と結論する。そして「同じもの」として繰り返される歴史には(少しずつ前進する)「数的に同一の魂があるのか」という問い、あるいは、永遠回帰を仮定した場合に、歴史や魂は「非常に似ているが、本当は異なるのかどうか」(72.115note)という課題は、結局、「計算」では決定できず、「事物の調和 congruentia」、言い換えれば、「最善」ないし「神の智慧」に最も適うものの理論に訴えなくてはならないと答える。それが「不可識別者同一の原理」の語る隠された意味なのである。このような理路の末に、ライプニッツは、「人類はつねに同じ状態にはとどまらない」として、ホラーティウスの詩句を隠喩的に使用する。

いつも同じ弦を弾く[誤る oberro]ことは、神的調和に一致しないからであ

33 1693年のMeier宛書簡のライプニッツは、「万物共感」説に触れ、人間には感知できない運動が存在すること、個々の結果には無数の原因が介在している点を指摘し、連続するものの現実の無限分割をその理由に挙げる。そして、さらにエピクロスの「原子論」が主張するように、もし世界が原子から成るとすれば、被造物も宇宙の完全な認識に到るだろうと推論できるが、前件は受け入れられないので、結論も帰結しないと述べる(Leibniz. 1991. 114ff, AI.9.228ff)。また、ここではルクレティウスの原子論が、ライプニッツの場合と同様、アルファベットのよう有限個の単純構成要素の結合法により世界が記述できると考えたと思なされている(ibid. 42)。しかし、後者の「概念」に関する論理原子論的着想も、「人間的知識の地平」では一定の制限を有することが示されている。この点は若い頃のライプニッツからの変化として語ることができる(松田.2003.83)。

る。むしろこの調和congruentiaの自然的な根拠に従えば、信じなくてはならぬのは、事物は少しずつでしかなく、ときには飛躍もあるとしても、より善なるものに向かわなくてはならないことである。なぜならば、物事はときにはより悪いほうに向かっているように見えるが、それが生じるのは、より善いものに向かって飛ぶために、後ずさりするような仕方なのである（74）。

後半には歴史の弁神論の論理が明瞭に見て取れる（松田.2018b）が、ライプニッツは、ホラーティウスの詩句に寄せて、「不可識別者同一の原理」を歴史に対して使用したのである。以上が「回帰思想」批判の文脈での現実的時間の個体性の位相であり、ホラーティウスのキタラー弾きの句のライプニッツ的な解釈である。このように、『万物回帰』は、後述の『弁神論』211節以上に、現実的時間の個別性と差異性を際立てている。ライプニッツが、現実的時間としての歴史的「現在」の「瞬間」が結合法と原子論では説明できないと論じる理由は、事物ないし世界の現実的無限分割と「不可識別者同一の原理」に依拠する「感知できない差異」の認識論的・存在論的根拠そして弁神論の価値論的根拠に見いだされるが、こうして現実的時間の特徴が、回帰思想との対決を通してより鮮明となったのである。その結果、「不可識別者同一の原理」を「現実的時間」に肯定的に適用する意義も明らかになり、本稿の出発点にあった、クラーク宛第5書簡27節の現実的時間の存在論にも適切な光が当てられるだろう。

もう一つの文脈である生物学的相ではライプニッツの発生学上の「予先形成」説が問題となるが、それは「発展的進化」の学説として解釈される。これに関連するライプニッツの思想は、部分的には動植物の変異に関する様々な経験的観察に基づくだけでなく、完全性を増加させる双曲線モデルBの場合のように、形而上学的にも論証される。つまり、多様な種類の動植物に関する発生上の事実について、飼育の諸経験をもとに生物学的に推論するだけでなく、『人間知性新論』では猫属の先行する共通種に自然的に生じた、多様な種

への分岐さえ論じられる (AVI.6.317ff) が、この推論は、理性的動物としての人間を含む生物の「種」の固定性に対する問題を形而上学の次元で提起するのである——それは「存在の連鎖」ないし種や個体の「時間化」(Lovejoy.259. Matsuda.2016b) である。

ライプニッツは、この時間化を徹底させ、同一の個体が「或る種から別の種へと」たえず変化しているとまで述べる (AVI.6.308)³⁴。ライプニッツの考えでは、動植物の自然史 (誌) において、いわゆる「怪物 (畸形)」に出くわすことがあるとしても、一定の規則性の範囲内で、それを「不正則」なものとして原理的には説明する機械論的な諸根拠を持つことができ、自然法則の一般的な枠組みから逸脱することはない。つまり、そのような出来事も全体としては生物の「進化」の長い過程の一契機として位置づけられると言うのである³⁵。

こうしてホラーティウスの句の『弁神論』での引用の意味も読み取れる。それは、「不正則」なものもそこでは生じる自然史を含む、神の創造としての歴史全体の現実的時間の存在様態を理解させるものである。実際、『弁神論』211節の課題は、ライプニッツの弁神論を擁護し、「不正則」を無意味な悪とするマルブランシュの立場から区別することであった。不規則性のない、神の創造における自然法則の体系的統一を要求するマルブランシュの主張に対抗して、ライプニッツは、この世界と現実的時間の建築術ないしは「経済 (摂理)」に関する自分の見方の利点を述べ、「いつも同じところで間違うキタラー弾きは笑いものになるだろう」を引用した——その解釈は、一つとして同じまちがいはないこと、つまり、不正則のような変異も個体的であり、かつより善いものがそれに続く要件となっている、と言うことである。

隠喩的に解釈すれば、歴史の楽曲を作り奏でる神は、そんなキタラー弾きで

34 「種」の生物学的概念は複雑であり、ここでの用語法は近代的な意味で生物学的存在を意味するとまでは言えない (Mayr. 335ff)。

35 そのような見方はライプニッツ以降の近代の「進化論」のうちでより正確に認識されることになる。「非ダーウィン主義」も含む進化論の多様なタイプと複雑な歴史は Bowler が詳しい。ライプニッツの「進化」の概念に関しては (松田.2017) を参照されたい。

はない。人の眼や耳にはまちがいや「不正則」が同じに感じられたとしても、歴史のなかではそれらはいつもどこかが異なる（はずである）。それは、後続のより善い帰結のための「必要悪」でもなくてはならない。この点でもライブニッツの弁神論は時間的である（Elster.207ff.松田.2018b）。神は、連鎖する現実的時間としての瞬間を繰り返さない。ライブニッツの形而上学は、現実的時間に関して、私たちがその真理を判明には識別できないとしても、確かに瞬間が唯一的存在であると同時に他のあらゆる瞬間と「調和的」であると述べるのである。これが「現実的時間の関係主義」なのである。

5. まとめに代えて（補論）

まとめに代えて、キタラーの弦の音の隠喩は、世界の存在に関する「本」と「結合法」のモデルの限界を問題提起していることに触れておきたい——それらはライブニッツ自身が「普遍数学」によって構想した知識の哲学のモデルでもある。つまり、音符で書かれた楽譜とキタラーの一回ごとの演奏を対比すれば、或る瞬間の演奏——演奏者の解釈と身体的パフォーマンス——は記号のタイプの同一性に尽きない点が見えてくる。それは、弦を指で弾き、耳がその振動を聞く、旋律、和声、律動のトークンの唯一個性を示唆すると解釈できる（楽器や気温などの条件が異なれば、音色も異なる）。それは「より善いもの」（より美しい曲の創作や演奏）に向かうとも考えられる（これは、生物の「発展的進化」に向かう、「自然的現在」としての「瞬間」にも妥当するだろう）。ここで強調すべきことは、物体運動を記述するための数学的枠組みとして反復される「タイプとしての観念的時間」とは異なり、「瞬間」としての「現実的時間」が、「エンテレケイア」として下書きされた「傾向性」を現実化する出来事である一方、ライブニッツがそれを或る「楽曲」の実現以上のものと考えた可能性があることである——これが「本」の隠喩に尽きない「個体」と世界

の時間的な有り方を示唆する³⁶。

個体のこの時間性は、キタラー弾きの演奏でも、「泉」のように自ら湧き出る「現実性」ないし活動性³⁷として「エンテレケイア」と関係づけることができる。『モノドロジー』18節は、単純実体つまり創造されたモノドを「エンテレケイア」と呼ぶが、それは、モノドが「自分のうちにある種の完全性をもっているから」であり、その自足性により、モノドは自分自身の内的作用の源となり、いわば「非物体的自動機械」となる。この「内的作用の源」と「非物体的自動機械」の存在の契機が「瞬間」なのである。しかし、本稿が論じたように、ライプニッツの「瞬間R」は、「原子」や幾何学の「点」ではなく、「他」を表現する点で、デカルトやニュートンの「瞬間」と異なるのであった。

また、『モノドロジー』14節は、「エンテレケイア」を、形相や「魂」の類義語として他を表象・表現する（動物の魂の）「推移状態」としても位置づけるが、ライプニッツは「エンテレケイア」を『パイドロス』の「自分で自分を動かすもの」（245c）、あるいは手を離せば矢が飛ぶ弓の隠喩のように、「妨げられなければ發揮される自然」としての「力」（『デ・アニマ』412a.『形而上学』1050a22,1044）とも関係づける。それは「テロス」を実現する力そのものである。瞬間としての「現実的時間」を、このような「エンテレケイア」の観点から捉えることで、瞬間は、ライプニッツがアナクサゴラスから継承した、「回転」であり、「事物の相互依存」である、περιχώρησιςのように（Matsuda.2017）、何か神秘主義的な響きを伴うとしても、同時に「一切が一切に関わる」有り方を示すものとして把握されることが出来るものになるだろう。この「関係」が

36 個体の「完足概念」も結合法と概念論理学の枠内にある以上、「現実的時間」に見られる個体の有り方は、主語としての個体が「無限（の述語）を含む」という言い方で済ませられないものを内包すると言わざるをえないように思われる。

37 この活動は単に純粹に「心的」ではなく、ライプニッツが生物を論じるときに用いた概念、「水力・空気・火力の機械」の火に譬えられるような「エネルギー」によるものである。『モノドロジー』48節ではヘルモウス・バルバルスの訳語、perfectihabiaに言及があり、62,63節では「エンテレケイア」が充実体のなかにある生物の「身体」のあり方として説明される。

「瞬間」を孤立させないのであり、モノドとその現在の先行決定は、形而上学的ではあるが、その推移状態と連続性の「時間」の時制的位相に関して人間的経験にも訴える説得力をもち、「現在主義」や時間の構成論とライプニッツの時間論を区別するのである。

[補足] 上記二つの想定とは以下のようなものである。[想定1] 可能なあらゆる本の数は限定できる。本は、或る限定された長さを超えることがなく、意味のある語と意味のない語で構成される。したがって、その数が「意味のある本」のすべてである³⁸。ここで「或る限定された長さの本」は「一定の文字数を超えない本」とであると定義する。たとえば、二つ折り本1万頁、各頁100行、各行100字とすると、その本は、1億字になるが、「或る限定された長さの本」はこれを超えない。ここで可能な本の数も同じく或る長さを超えることはなく、それがアルファベットの1億文字で書かれるとしても、有限である。

本の組み合わせを計算すれば、可能な本の数も計算できる。しかし、それぞれが少しでも違おうとしても、想定される文字数を超えない。ライプニッツはこの数をNとする。ここで或る年の国家の歴史[普遍的公共史]を、1億字以下で十分に記さなくてはならないとする。このとき国家史の本の数も限定される。新しい本が書かれても、本数はNを超えない。ここで人類が有限な時間しか存続しないとすれば、「いつか必然的に以前の歴史が繰り返される」(Leibniz.1991.68)。ライプニッツは、数Nを試算し、それがどれほど大きな数に見えても、その字数は有限である点を示す。これが「本」のモデルによる歴史の「永遠回帰」の論証である。この証明は、人類が続く年数がN以上と認めらるならば、そこに異なる歴史があるか、先行の歴史と後続の歴史のパターンが正確に一致するのが見られるかのいずれかであるが、前者の場合でも、この可能な歴史はこの年数で尽きる、というものである。仮定により人類がN年以上

38 フィッシュンは、ライプニッツのこの思想に関するブルーメンベルクの解釈に言及しているが、世界に関する「本」の隠喩は、世界の一部の象徴にとどまることがわかる。

存続すれば、先行の歴史は正確にNに従う年数で繰り返される。

[想定2] ライブニッツは、この論証を個人史に拡張しても結果は明らかであるとする。地球上に10億人が存在すると仮定し、各人の人生1年の「細部」を記すと想定する。当然、個人史の本の数は、国家史の本よりも大きくなる。一人に1万時間、1万字、つまり、100字×100行=100,000字の本1冊を書くとして、それが10,000字×10,000時間=1,000,000,000字になる、と計算する。その文字数は、10億になるが、本の数はこの文字数を超えることはなく、有限である。いま国家史の本の数と同様、互いに異なる個人史の本の数をQとすると、個人史の場合、その細部や状況も関係するので、QはNよりも大きくなると考えられるというのが、ライブニッツの論証である。そして年数がQより大きくなれば、同じパターンが現れると考えられる。以上が「本」と結合法の着想による歴史の回帰の論証である。

実は、もう一つ[想定3]がある。ライブニッツは、人類の存続が永遠でない場合も、真理を認識・探究する精神が存在するだろうとし、それが感覚的証拠に依存しない、純粋科学の諸定理に到ると想定する。そこで再び、結合法の着想から定理の形での「真理の回帰可能性」に触れる。また、数学の定理が新発見されれば、それは「無限に」長くなりうる点にも言及する。さらに数学が発展すれば、自然認識も進み、動物の身体の構造解明や蓋然的な将来の予測もできるようになると述べる。そこには円の定義より複雑な、雑然とした表象も含む、経験を前提に「混合科学」としての生物学の種「ハエ」の定義も含まれる。そして、最後に、ライブニッツは、人間の精神が科学に関する「現在の認識能力」として人間的な「地平」を有すると述べる。この地平はモデルBの意味で「無限」を内包した。その限りで「永遠回帰」は退けられる³⁹。

39 永遠回帰と「大いなる正午」や輪廻の哲学的問題はニーチェや九鬼周造の哲学（cf. 伊藤邦武）にも関わるが、本稿とそれらの関連は今後の検討課題としたい。研究を進めるに当たり、科学研究費補助金（17K02169）の恩恵に浴したことを謝して記す。

【文献表】 典拠は本文中に丸括弧内で示し、註と区別した。ライプニッツの文献参照は以下のもの以外は慣例に従う。他は筆者名、(複数の場合) 発行年、頁数で表記し、必要な場合を除き、題名などは文献表に記載した。邦訳参照の場合はそれを挙げた。

Leibniz, G.W., 1991. *De l'horizon de la doctrine humaine* (1693) ; *Apocatastase pantiön (La Restitution universelle)* (1715) textes inédits, traduits et annotés par Michel Fichant. Paris.

Anfray, J-P., 2012. “À la recherche de la flèche du temps. Les asymptotes temporelles chez Leibniz” SL.65.81-105.

Arthur, R.T.W, 1985. “Leibniz’s Theory of Time” *The Natural Philosophy of Leibniz*. ed. by. Okruhlik, & Brown, J.R. Reidel:263-313

Böhme, G. 1974. *Zeit und Zahl Studie zur Zeittheorie bei Platon, Aristoteles, Leibniz und Kant*. Frankfurt, a.M.

Bolton, M., 2004. “Leibniz to Arnauld Platonic and Aristotelian Themes on Matter and Corporeal Substances” *Leibniz and His Correspondents*. Lodge, P., (ed.) Cambridge.

Bowler, P.J. 1988. *The non-Darwinian revolution: reinterpreting a historical myth*. Johns Hopkins University Press.

Blumenberg, H., 1981, “Weltchronik und Weltformel” *Lesbarkeit der Welt*. Frankfurt. a.M.

Breger, H. 1987. “Der Begriff der Zeit bei Newton und Leibniz” *Kassler Philosophische Schriften*. 17:37-54

Curtis, L.B., & Robson, Jo, 2016. *A critical Introduction to the metaphysics of time*. Bloomsbury.

Elster, J., 1975. *Leibniz et la Formation de l'esprit capitaliste*. Paris.

Fichant, M., 1991. “Ewige Wiederkehr oder unendlicher Fortschritt: Die Apokatastasisfrage bei Leibniz” in: *Studia Leibnitiana*. 23(2), 1991.133-150.

Fichant, M., 1998. *Science et métaphysique dans Descartes et Leibniz*. Paris.

Futch, M.J., 2008. *Leibniz’s Metaphysics of Time and Space*. Springer.

Futch, M.J., 2012. “Leibnizian Relationalism and Temporal Essentialism” SL.65.60-80.

伊藤邦武 2014. 『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』 ぶねうま舎

Knoppik, J., 1997. „Leibniz’ Fortschrittskriterium: Das Übergehen zu Neuem“ in: *Studia Leibnitiana*, 29(1) . 45-62.

Lovejoy, A., 1936. *The Grate Chain of Being*. Harvard University Press.

Mayr, E., 1998. *Towards a New Philosophy of Biology Observations of an Evolutionist*. Belknap Press of Harvard University.

松田毅 2003 『ライプニッツの認識論』 創文社

松田毅 2005a 「なぜライプニッツは時間と空間を「観念的」と考えるのか—ライプニッツ-クラーク書簡の認識論的考察」『関西哲学会年報』 13. 62-75.

- 松田毅 2005b 「ライプニッツ 真理と根拠の多様性と統一性—「同一性」の論理と認識のトポス」『真理の探究』村上勝三編 知泉書館 179-212.
- 松田毅 2010 「ライプニッツ原因概念の分析—その歴史的な文脈と現代的な可能性」『ライプニッツ研究』創刊号 115-134.
- 松田毅 2012 「現代形而上学とライプニッツ」『ライプニッツ読本』法大出版局 酒井・佐々木・長綱編 323-334.
- Matsuda, T., 2016a. "The actual time in later Leibniz" *Vorträge des X. Internationalen Leibniz-Kongresses*. ed. W. Li. et al., Olms. III. 441-455.
- Matsuda, T., 2016b. "Leibniz and "Biology"—A historical and philosophical consideration" *Selected Papers in Contemporary and Applied Philosophy The 2nd CCPEA*. 101-117.
- Matsuda, T., 2017. "Leibnizian naturalism seen from his reception of Anaxagoras's "perichôresis" *The Journal of Philosophical Ideas. Special Issue*, 395-419.
- 松田毅 2017 「ライプニッツの生物哲学—「進化する自然機械」」『神戸大学文学部紀要』44.1-48.
- 松田毅 2018a 「生命は実体か属性か—ライプニッツの生命論あるいは「水力・空気・火力の機械」としての生物」『神戸大学文学部紀要』45. 93-137.
- 松田毅 2018b 「ライプニッツの経済哲学試論—自然と規範」『ライプニッツ研究』第5号
- 松田毅 2018c 「二つの形成的自然—カドワースとライプニッツの差異」『西日本哲学会年報』第26号西日本哲学会編 1-16.
- マクダガート, J.E., 2017 『時間の非実在性』永井均訳、講談社（原著1907年）
- Parkinson, G.H.R. 1992. *De summa rerum: metaphysical papers, 1675-1676 G.W. Leibniz*. New Haven.
- Rateau, P., 2014. "L'univers progresse-t-il?" *Archives de Philosophie*. 77.81-103.
- Vailati, E., 1997. *Leibniz and Clarke. A Study of their Correspondence* Oxford.

※ホラーティウス『詩論』（岩波文庫岡道男訳250頁）

「けれども、欠点があっても大目に見たい場合がある。弦は、心が望み、手が求めた音を返すとはかぎらず、低い音を求めたのに高い音で応えることもまれではない。弓は狙った的をいつも射当てるわけではない。しかし、詩の大半が輝きを放っているなら、わずかのしみのせいでわたしが気分をそこねることはないだろう。それは不注意の手からこぼれ落ちたものであるか、あるいは、人間であるかぎり用心しても避けられなかったものであるから。とすれば、どうなるのか。書物を筆写する者が何度注意されても同じ誤りを繰り返すなら許してもらえないのと同様——キタラー弾きがいつも同じ弦をまちがえるなら物笑いになるのと同様、何度もしくじる人はわたしの目にはかのコイリロスと同じに映る。コイリロスがせいぜい二、三度すぐれた詩人となるときは、わたしは笑いながら感心する。ところがすぐれたホメーロスが居眠りするときは、わたしは腹を

ライプニッツの時間論——「現実的時間の関係主義」——

たてる。けれども長大な作品であれば、眠気が忍び寄るのも無理からぬことだ。」